

# 巻 頭 言

## 探検部創立10周年をむかえて

杉 原 弘 人

今年で探検部が結成されて10年になるという。ニューギニア探検に行くというので仲間入りをして以来、私は探検部とつきあいをしているから、このつきあいもかれこれ10年になるだろう。未知の地域を踏破し調査することではじまった探検部はいまでは洞窟・ボート・アクアラング・技研・調査の各部門にわかれ、大いに活躍している。危険のともなり活動が多い部であるのに、この10年間、全く無事故であることは探検部のもっとも誇るべきことである。

探検部の発足以来の夢は海外遠征であった。

1960年の夏、ニューギニア研究会ができ、ニューギニア探検を計画したが、実現せず、翌年渡航制限の緩和された沖縄に学術調査隊がでかけたのが、せめてもの海外？遠征であった。どこまでも青い空、熱帯魚の美しいサンゴ礁の海、離島のまっ白い小道を歩みながら、遠い海外に調査隊を送る日を夢みたのである。

1965年の春、創立80年記念事業として、探検部OBと山岳部OBとによるペルー・アンデ

ス学術調査隊が南米に派遣されることになった。大学創立以来はじめての海外学術調査に探検部が加えられたことは、永年の夢が実現したとみてよいだろう。ヒリジャンカ、シウラ・グランデへのアタック、サンタ・ローザ東峰の初登頂など、3か月間という短期間であったが、その成果は予想以上であった。

海外への調査隊が発出するまでの準備の繁雑さ、資金が海外ではいかに必要か、などはじめての海外遠征で私たちは経験した。

今年の春、探検部独自の海外遠征であるフィリピン学術調査が実現し、1968年には第2回の調査隊の派遣が予定され、ボルネオの学術調査も計画中である。

これからの探検部の活動範囲は海外である。

探検部の諸君は誰でも、いつでも、すぐに海外に出発できる準備と心がまえが必要である。語学の修得、強固な体力と意志の養成、どのような困難でも克服しうる気力、これらがなくては探検部の今後の発展は期待できない。

すぎはら・ひろと (社会学部教授)